

歩きスマホ行動に影響を及ぼす要因の検討

坂本 彩

(文化情報論分野)

要 約

近年、危険だと分かっているにもかかわらずやってしまう歩きスマホ行動は、社会的な問題となっている。歩きスマホ行動とは、「歩きながらスマートフォンの画面を見たり、それを操作したりする行為」である。態度と行動の不一致について、リスク行動に関する研究では、意識的なルートと反応的なルートの二重プロセスによって行動が生起することが明らかになっている (Gibbons, Houlihan, & Gerrard, 2009)。意識的なルートは、意識的動機である行動意図やその先行要因からなり、反応的ルートは、個人の意志や意識的な判断によって行動を引き起こす状況反応的にリスク行動を選択する非意図的動機である行動受容とその先行要因からなる。歩きスマホ行動も態度と行動の不一致が起きていることが示唆されているものの (佐藤・芳賀, 2015)、その心理プロセスを明らかにする研究はほとんど行われていない。そこで本研究では、意識的なルートと反応的ルートの2つのプロセスを仮定し、歩きスマホ行動の心理プロセスを明らかにすることを目的として研究を行った。また、周囲の状況を、危険性が高い状況と低い状況の2つに分け、周囲の状況の違いによる歩きスマホ行動の心理プロセスの差異についても検討した。大学生231名 (男性136名、女性93名、不明2名) を対象とする質問紙調査を行った。その結果、歩きスマホ行動は、意識的なルートと反応的ルートの2つのプロセスによって行動が生起することが明らかになった。意識的ルートは、対象に対する評価である態度が「歩きスマホ行動をとらない」という意志を規定し、反応的ルートは、行動をとる人物が周囲にどれくらいいるかという記述的規範およびスマートフォン使用習慣が行動受容を規定していた。危険性が低い状況ではスマートフォン使用習慣が態度と記述的規範に影響を及ぼすなど、全体的に歩きスマホ行動を助長していた。そして、危険性が高い状況では反応的ルートの影響が強く、危険性が低い状況では意識的ルートと反応的ルートの両方が影響を及ぼすことが示唆された。また、危険性が高い状況ではリスク認知が高く、歩きスマホ行動を抑制する要因にならないことが明らかになった。歩きスマホ行動が原因で事故が起きている駅等の危険性が高い状況における歩きスマホ行動の抑制は、従来のポスターや動画等によって歩きスマホ行動へのリスクを喚起する方法では難しいため、スマートフォン使用習慣の抑制や他者の歩きスマホ行動を正しく認知させるための情報提示を提案する。